Ⅱ　組織の取組

1　過年度の取組

本校では、平成 27 年度土曜授業推進事業の指定を受け、土曜日を年間 10 日開校日とし、教育活動を実施した。本校の伝統として、体育祭や文化祭をはじめとした学校行事への地域住民の参加率が高い。また、地方祭等の地域諸行事においても、本校の生徒がその担い手として参加するなど、地域との関わりが非常に強い。そこで、その計画段階において、教科指導だけでなく、地域活動を取り入れることにした。それまで、本校においては担当課や部活動単位において、それぞれ地域活動に取り組んでおり、学校全体として取り組むような体系的なシステムが確立されていなかった。そのため、週に１時間の総合的な学習の時間に、学校全体として地域連携活動に取り組むよう、総合的な学習の時間に取り組む地域活性化事業を「三崎おこし」と名付け、カリキュラムの見直しを行った。１年生「地域理解学習」、２年生「地域活性化プランの作成」、３年生「地域活性化プランの実践」とし、総合的な学習の時間に加え、開校土曜日の２時間を使って年次進行で三崎おこしに取り組むこととした。また、研究グループごとに教員を配置することで、生徒・教職員ともに「学校全体で地域協働活動に取り組む」という意識が醸成された。

平成 28 年度には「地域に生き地域とともに歩む高校生育成事業」、平成 29 年度には「コミュニティースクール推進校」、平成 30 年度には「地域を担う心豊かな高校生育成事業地域活性化プロジェクト」の指定を愛媛県教育委員会より受け、地域協働活動の研究に取り組んできた。４年間の取組を通して、本校卒業生や地域住民、各種団体と連携して活動する機会が増加し、多くの人に本校の取組を知ってもらうとともに、地域との協働による活動への協力体制を確立することができている。

さらに、平成 28 年度より、「伊方町まち・ひと・しごと創生総合戦略」において中核事業として設立された「伊方町移住・定住促進協議会」の構成メンバーとして連携活動を行っている。具体的には、同協議会の会議への参加に加え、同事業の「次世代人材育成事業」として外部講師を招き、「伊方町移住・定住促進協議会」に共催、伊方町、伊方町教育委員会に後援していただいて、学校という枠を越えた町全体でのシンポジウムを開催したり、東京で行われた「特産品フェア」に本校生が帯同し、町の PR を行ったりするなど、地域を担う学校として伊方町と連携して多くの活動に参加してきた。

上記のように、本校がこれまでの４年間、地域との協働活動において積み上げてきた経験や、そこから得られた学びは、生徒、教職員と校内全体のそれぞれの立場の間で共有されるとともに、地域や外部人材との連携を生み出している。

2　コンソーシアム

(1)　概要

本事業の実施においては、これまで、それぞれの場面での地域協働活動で育まれた学校と地域の結び付きを軸に、より組織的、継続的な取組を行っていくための組織である「コンソーシアム」を編成することにした。コンソーシアムは地域の人を中心に組織し、様々な立場、視点からの指導・助言を行ってもらうことで、本事業の効果的な実施を行っていくとともに、コンソーシアムメンバー同士の連携を深めることも目的とした。

本年度の活動内容としては、実施事業への指導・助言、来年度実施事業への助言、来年度カリキュラム編成の協議、本事業の運営に関する助言等である。大学や地元 NPO 法人、行政等それぞれの視点から多角的な意見を出してもらうことで、校内の委員会だけでは気が付かない意見や、新たな発想からの助言等をもらうことができた。

本年度は、11 月と２月に２回コンソーシアムを開催した。来年度は第１回目を５月ごろ、第２回目を２月ごろに開催する予定としている。

コンソーシアム参加団体一覧（順不同、敬称略）

機関名	機関の代表者名
愛媛大学	学長　大橋　裕一
NPO 法人佐田岬ツーリズム協会	理事長　宇都宮　圭
NPO 法人さだみさき夢希会	代表　加藤　智明
NPO 法人二名津わが家亭	代表　増田　克仁
伊方町役場	町長　高門　清彦
濵田企画事務所	代表　濵田　竜也
公営塾未咲輝塾	塾長　長瀬　智寛
愛媛県教育委員会高校教育課	課長　和田　真志
愛媛県立三崎高等学校	校長　若江　　亨

(2)　第１回コンソーシアム

①　期日　令和元年 11 月 27 日（水）

②　参加者

笠松　浩樹氏（愛媛大学）、宇都宮　圭氏（佐田岬ツーリズム協会）、
田村　義孝氏（さだみさき夢希会）、増田　克仁氏（二名津わが家亭）、
山内　清秀氏（伊方町役場）、篠澤　仁人氏（伊方町教育委員会）、
和田　真志高校教育課長、山下　潤指導主事、
濵田　竜也カリキュラム開発等専門家、
長瀬　智寛地域協働学習実施支援員、
若江　亨校長、川野　光正教頭、津田　一幸地域協働課長、
河野　雄太地域協働課員、大西　純地域協働課員、渡辺　修地域協働課員

③　開会行事

（校長挨拶）

本校では、これまでも地域との連携に取り組み、学校の魅力化を図ってきた。本年度より文科省事業の指定を受けることになるので、皆さんからのご意見をいただき、より良い活動にしてきたい。

④　本事業の概要説明と生徒活動報告

【概要説明】

地域課題として、若者の流出が多く、その若者が帰ってきにくいということがある。そこで、本校では、「ブーメラン人材」の育成、地域に愛着を持つ心の育成等に取り組んでいる。また、伊方町を持続可能な町にしたいと考えている。

三崎高校の活動の特徴として、本事業を行うにあたって新たに外部団体をお招きするのではなく、今まで協力していただいた方に、引き続き協力していただいていること、また、一つの分野に特化しているのではなく、幅広く多くの分野の研究を行っていることが挙げられる。

近年の進学、就職実績も、地域活動に取り組んだ経験が生かされたような結果となっている。

今後の課題は、町外から入学してきた生徒も、地域課題を自分事として捉

えること、また、経験したことを教科へ返していくこと等が挙げられる。

【生徒活動報告】（記載省略）

⑤　研究協議

・地域との協働活動をさらに進めていくための情報発信の方法について検討

・卒業生のＵターン率を高めるための取組について協議

・コンソーシアムの在り方について協議、情報通信機器等を活用した情報共有について提言

⑥　質疑応答

（田村　義孝氏）

三崎おこしを通じて、どのような成果が出ているのか気になっていた。三崎高校でこのような形で成果が現れているのがよかった。三崎高校ならではのカリキュラム作り、体系作りをしなければならないと感じた。

（和田課長）

これからは、総合的な探究の時間だけでは無理である。新学習指導要領では教科で扱うことが可能になったので、これまでにやってきたことを踏まえて、各教科・科目における取組をもっと推し進めていけたらと思う。

（笠松　浩樹氏）

大きな成果に感銘を受けた。本年度の全校生徒数の中で、生徒の地区別割合はどうなっているのか。

（若江校長）

今年の１年生は３分の１が三崎地区、半数が伊方町内である。全校では、町内出身の生徒が６割程度、町外出身の生徒が４割程度の割合である。

（川野教頭）

来年度からは、町内だけでは生徒数は到底足りないので、県外などにも呼びかけている。それらも含めて、今後はまた違った出身構成になってくると思う。

（増田　克仁氏）

地域事業に関わっている人は、このような三崎高校の活動を知っているが、関わっていない人にどのように伝えるか、そしてどのように関わってもらうかが課題である。地域住民は、三崎高校に協力したいので、もっと協働してやっていけたらと思う。

（和田課長）

本年度生徒募集に関して、今治北高等学校大三島分校が大きな成果を上げた。また、今治西高等学校伯方分校も広報用の新聞を作って、新聞の折り込みとして地域に配っている。三崎高校も先端の取組みを行っているが、他の高校の取組みも勉強し、取り入れたらと思う。

（宇都宮　圭氏）

三崎高校生徒募集を折り込みしたらだめなのか。

（和田課長）

確かに、それは見たことはない。発想はおもしろい。調べてみて、問題ないならやってみたらよいと思う。

（川野教頭）

本年度は、ポスターも作成して、多くの場所に配布・掲示している。また、フェイスブックなどでも情報を発信している。

（長瀬　智寛支援員）

データを見て、学校生活の満足度の項目で、1年生の 89.7%がこの学校に入学してよかったという結果である。来年度も同じような率を維持していただきたい。しかし、自己能力認識での、「将来三崎で働きたいか」が 42%である。これは、本事業の最終目標である「ブーメラン人材」の育成にはつながっていないので、来年度以降はそちらに重きを置いてもよいのではないか。

（山内　清秀氏）

この会議の意義はどのような位置付けなのか。また、本校の取組をもっと生徒自身が自主性をもって取り組めば、自己肯定感を高めることにつながるのではないか。ブーメラン人材育成に関しては、ぜひ生徒の追跡調査をしていただきたい。

（津田）

コンソーシアムについてだが、これまでも地域の方に様々な面で本校の教育活動に協力していただいていたが、体系的には弱い面もあった。複数の方が一同に会することで、より組織的な取組を行うとともに開かれた活動を行っていきたいという思いがあり、コンソーシアムを組織させていただいた。

（河野）

実際、こちらが生徒に投げている状態であるのも実態ではあるが、近年、少しずつ生徒の自主性が出てきているのも事実である。

（和田課長）

追跡調査は、やり方を考えて行わないと不可能になってくるし、負担になってくる。

（田村　義孝氏）

文科省の事業のために集まるのではなく、今後も地域が関われるような仕組みをつくっていってほしい。

（川野教頭）

教員だけでは解決できないこともあるので、もう少しよい形を提供できるようにしていきたい。

⑦　閉会行事

（校長挨拶）

熱心にご協議いただきありがたい。本日いただいた貴重なご意見は、本校で練り上げ、今後の活動に生かしていきたい。

(3)　第２回コンソーシアム

①　期日　令和２年２月 20 日（木）

②　参加者

田村　義孝氏（さだみさき夢希会）、増田　克仁氏（二名津わが家亭）、
山内　清秀氏（伊方町役場）、篠澤　仁人氏（伊方町教育委員会）、
和田　真志高校教育課長、野村　竜也指導主事、山下　　潤指導主事、
長瀬　智寛地域協働学習実施支援員、
若江　　亨校長、川野　光正教頭、津田　一幸地域協働課長、
河野　雄太地域協働課員、大西　　純地域協働課員

③　開会行事

（校長挨拶）

忙しい中コンソーシアムに参加していただき、心より感謝申し上げる。本日は、今年度の事業報告や来年度行事等の説明を行う。様々な立場からの御意見をいただきたい。

（高校教育課長挨拶）

本校は、文科省より３年間、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定を受け、プログラム開発を進めている。コンソーシアムに参加している方からは、多大なる御協力をいただき感謝している。本校のこの事業の成果が、様々な場面で評価されているのではないか。来年度のより良い事業推進に向け、本日は建設的な協議をお願いしたい。

④　本年度事業報告（資料）

時期	活動内容	
	生　　徒	教　　員
４月	・三崎おこしについての説明を受ける ・校庭のだいだいを使用したマーマレード作り （ダルメイン世界マーマレードアワード＆フェスティバルに出品）	・文部科学省への提出資料作成 ・関連機関への連絡 ・第４回はなはな祭り打ち合わせ
５月	・第４回はなはな祭り参加（出店、ボランティア） ・四国まちづくりオフサイトミーティング 2019（発表） ・１年生地域探検① 「はなはなでみっちゃん大福を買おう」 ・１年生地域探検② 「伽藍山から伊方町を見てみよう」	・学校設定科目「未咲輝学」について検討 ・県外視察（８月）担当者で日程調整
６月	・ダルメイン世界マーマレードアワード＆フェスティバル銀賞・銅賞受賞 ・オリコの里コットン（裂織り）見学 ・みさこうマルシェ企画開始	・地域みらい留学フェスタ大阪（６／22） ・地域みらい留学フェスタ東京（６／29） ・地域みらい留学フェスタ名古屋（６／30）
７月	・みさこうフェスティバル　7／15 ・はなマルシェ出店　７／20 ・中学生１日体験入学での活動紹介　７／26 ・きなはいや伊方まつり 2019 イベント参加　７／28 ・第２回全国高校生 SR サミット FOCUS 参加（京都府）７／30～８／１ ・第２回全国高等学校小規模校サミット参加（山形県）７／30～７／31	・「みさこうマルシェ」外部団体と打ち合わせ ・「せんたんミーティング」案内開始 ・「みさこうマルシェ」準備・告知
８月	・みさこうマルシェ　８／３	・「せんたんミーティング」資料作成

９月	・「せんたんミーティング」開催 ９／21～９／22 ・「EGF アワード 2019－2020」ビジネスプラン提出	・「せんたんミーティング」広報
10 月	・2019 年度風車まつり参加（出店）　10／６ ・三崎地区地方祭参加・見学 ・三崎地区文化祭参加　10／27	・日曜親子オープンハイスクール （10／20）
11 月	・三崎高校文化祭　11／３ ・日曜親子オープンハイスクール発表　11／17 ・「こんなのあるんだ！大賞 2019」大賞　11／19 ・「えひめ地域づくりアワード・ユース 2019」資料提出	・日曜親子オープンハイスクール （11／17） ・「せんたん劇場」企画開始
12 月	・地域教育実践交流集会参加（発表）　12／７ ・佐田岬ワンダービュー表彰式　12／７ ・人口減少社会に挑む！フォーラム 2019 参加（発表） 12／14 ・佐田岬ワンダーナイト出店　12／21 ・「エシカル甲子園 2019～私たちが創る持続可能な社会」 徳島県知事賞　12／27	
１月	・1 年間のまとめと研究報告会準備 ・サイクリングコースの研究 ・みさこう新聞企画・取材開始	・「せんたん劇場」打ち合わせ、告知 ・次年度総合的な学習（探究）について 協議 ・学校設定科目「未咲輝学」について 協議 ・「せんたん劇場」告知 ・成果発表会告知
２月	・「えひめ地域づくりアワード・ユース 2019」（発表） 審査員特別賞　２／１ ・地域教育実践南予ブロック交流集会参加（発表） ２／１ ・えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予 発表・パネルディスカッション　２／４ ・「せんたん劇場」の実施 ２／15～２／16 ・成果発表会「未咲輝 - せんたん - 発表会」　２／20 ・地域活動団体交流発表会「八のカン詰め」参加（発表） ２／24	・熊本県立上天草高等学校視察 ２／５ ・第２回コンソーシアム　２／20 ・第２回運営指導委員会　２／20 ・総合的な学習（探究）及び未咲輝学 の年間指導計画作成
３月	・フリーペーパー「みさこう新聞」発行	

⑤　来年度事業について

・学校設定科目「未咲輝学」について

・来年度教育課程について

・生徒・教職員の負担を減らすための工夫について

⑥　研究協議

（田村　義孝氏）

未咲輝学カリキュラムは、今までの総合学習の時間とは別でプラスアルファということなのか。

（津田）

別で実施予定である。

（田村　義孝氏）

２つ聞きたいことがある。１つ目として、生徒、先生たちは素晴らしい活動をしているが、体力的に時間的に大丈夫なのか。２つ目として、私がこの町で15 年活動してきた中で、この町は役者はそろっているが、プロデューサー的な人がいない。今のせんたん部は素晴らしい活動を繰り広げているが、プロデューサー的な方がいるのか。

（川野教頭）

先生たちが忙しいのは事実である。働き方改革もあるので、今後外部の方の協力がいることも事実である。来年度は、より具体的にバランスを考えていくことが大切である。

（津田）

カリキュラム開発等専門家である濵田竜也氏にアドバイスをいただいている。例えば、せんたん劇場については、大まかな枠組みや場所と日時を地域協働課と濵田氏で協議し、その後、各担当の教員が内容を生徒に下ろし、生徒同士が様々なアイデアを出し合い活動した。

（田村　義孝氏）

このような活動を今後も続けていけば、必ず地域に還元される仕組みになると信じている。今の先生方が転勤した後も、今の取組を続けられるよう仕組み作りをしていただきたい。この伊方町を起業家のメッカにすることが私の夢である。しかし、これらを実現するためには講師や予算が必要である。高校だけでこのような取組を継続していくには限界がある。ぜひ伊方町役場さんには、予算など付けていただき、町全体で取り組む仕組みを作っていただきたい。

（和田課長）

裂織りのシュシュであるが、県庁の方も大変注目している。うまくやれば、愛媛県としての情報発信にもなると思う。マーマレードは川之石高校に勤務していた時にネット販売したが、様々なハードルがあった。一時的な販売は今のままで大丈夫だが、継続した販売になると「知らなかった」では済まされないことがあるので、知っておいていただきたい。またカリキュラムにもあったSDGｓであるが、12 月に私も研修を受けた。「SDGｓで地方創生」ということでファシリテーターになられた方が新居浜にいる。イメージに基づいて研修をしてくださる。愛媛県ではこの方が第一人者である。これらのことが少しでも参考になれば。

田村さんの話にもあったが、国からの補助も長くて３年である。県から今後も継続して補助を続けることは無理である。３年終わってからが大切である。３年経ってどのような仕組みができているのか、仕組み作りが大切である。その後、上手につなげていけるよう、仕組み作りをしていただきたい。

（増田　克仁氏）

新しいカリキュラムについてだが。週１時間ということなのか。

（津田）
今の総合学習の時間に、プラス週に１時間である。
（川野教頭）
授業時間が押したとしても、柔軟な対応ができるように部活動や放課後の時間と相談しながら実施していきたい。
（増田　克仁氏）
教員の負担をなんとか軽減していただきたい。軽減すれば、おおらかになり、気持ちにも余裕ができるのではないか。若干、教員が生徒へ押し付けているようにも感じる。生徒の主体性に任せられるような、そんな余裕が生まれることが望ましいように思う。
（川野教頭）
県外からの生徒の入学希望者が来年度は増えており、その中には地域活動に興味を持っている生徒が多い。今までとはまた違った活動が展開されると期待している。
（山内　清秀氏）
カリキュラムはどこで作られるのか。その中に生徒の意見も必要かなと考えている。活動が押し付けになっているように感じる。そのあたりを十分協議してまとめていただきたい。
（長瀬支援員）
先生方の労働や、生徒が主体的に活動するバランスをとっていくことが必要だと思う。アンケートを見ても、本年度の活動は有益だったと感じる。三崎高校としては、数値が一つの指標としてあってもいいのかなとは感じる。１０人に４人は、生徒が満足していることが読みとれる。この結果は、地元への愛着につながると思うので、ここの部分が高いということは良いことだと思う。SDGｓに関しては講師を招くことができるのが一番良いとは思うが、金沢大学が開発したものが無料でダウンロードできるのでこれを活用してもよいのではないかと思う。
（田村　義孝氏）
役場の方にお願いがある。伊方町教育委員会としても、育成したい子ども像を確立してほしい。ハードばかりに予算をかけすぎているので、ソフト面にも予算をつけていただきたい。
（増田　克仁氏）
村井邸を使用する際、使用料をいただいているが、生徒たちや学校が活動をする際は、無償で使っていただいたらと思う。

⑦　閉会行事（校長挨拶）
本日は、本当に熱心なご協議をいただき有益な話し合いができた。今日いただいたご意見、有益な情報を今後に生かしていきたい。

３　管理機関及びコンソーシアムにおける主体的な取組について

(1)　職員体制に関する支援
①　小規模校で地域活性化活動に取り組むことを希望する優秀な教員の配置
②　本校出身の優秀な教職員の配置や、本校勤務年数が長い経験豊富な教員の配置

(2)　取組内容に関する支援

①　生徒のプレゼンテーション能力の向上支援（伊方町による全国高校生 SR サミット“FOCUS”における京都府までの旅費全額補助）

②　生徒のグローカルな視点の習得支援（未咲輝塾による世界ユースサミット参加、トビタテ！留学 JAPAN 応募にいたる指導）

③　生徒のコミュニケーション能力の向上支援（県教育委員会によるえひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の参加旅費令達）

④　伊方町による本校地域活性化に関する特別授業における講師謝礼、旅費の令達

⑤　伊方町による本校地域連携事業（せんたんミーティング、せんたん劇場）におけるチラシ制作費用全額補助

⑥　NPO 法人佐田岬ツーリズム協会によるブイアートプロジェクト（地域資源活用プログラム）における活動支援

⑦　NPO 法人二名津わが家亭による廃校活用イベント（地域資源活用プログラム）における活動支援

⑧　NPO 法人さだみさき夢希会によるみっちゃん大福の普及及び販売活動（特産品の開発）における活動支援

(3)　成果普及のための支援

①　えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催（２月４日、発表と意見交換）発表校
ＳＧＨ指定校（宇和島南中等）、ＳＳＨ指定校（宇和島東）、ＳＰＨ指定校（宇和島水産）、地域との協働による高等学校教育改革推進事業（三崎）、地域の魅力発信高校生サイクリング事業（川之石、南宇和）

②　「えひめ地域づくりアワード・ユース 2019」（県教育委員会等後援）への参加支援

(4)　運営に関する支援

①　運営指導委員会の開催
年２回実施（９月４日、２月 20 日）

②　コンソーシアムの開催
年２回実施（11 月 27 日、２月 20 日）

③　えひめスーパーハイスクールコンソーシアム in 南予の開催(発表と意見交換)
２月４日実施

４　伊方町（伊方町移住・定住促進協議会）との連携について

(1)　県外視察研修　全国高校生 SR サミット“FOCUS”参加（立命館宇治高等学校主催）

①　参加の目的
　他校の高校生及び国際大学生と、各校のプロジェクトの課題の解決について協働して取り組み、その解決策を検討することを通して互いに学び合う機会とする。そして、生徒が社会の一員として目指すべき社会の在り方について考え、どのように社会貢献できるかを考える。

② 期日

令和元年７月 30 日（火）～８月１日（木）

③ SR サミットの目的について

・他校の高校生等及び APU 学生と、SDGs に関わる各校のプロジェクトの課題について協働で取り組み、その解決策を検討することを通して、互いに学び合う機会とする。

・生徒が社会の一員として目指す社会について考え、どのように社会貢献できるか考える機会とする。

・教員もこのフォーラムへの参加を通して、互いの取組について共有し学び合う機会とし、今後も学校での取組を継続的に発展させるための方策を模索する。

・産学協働プロジェクトに発展させるべく、今回のつながりをさらに発展させる契機とする。

④ 参加校

育英西高等学校（奈良県）、石川県立金沢泉丘高等学校（石川県）、市川高等学校（千葉県）、愛媛県立三崎高等学校（愛媛県）、大分県立日田三隈高等学校（大分県）、静岡県立焼津水産高等学校（静岡県）、聖光学院高等学校（神奈川県）、青翔開智高等学校（鳥取県）、東洋大学附属牛久高等学校（茨城県）、長崎県立長崎東高等学校（長崎県）、奈良女子大学附属中等教育学校（奈良県）、福岡雙葉高等学校（福岡県）、宮崎県立飯野高等学校（宮崎県）、名城大学附属高等学校（愛知県）、MIHO 美学院中等教育学校（滋賀県）、立命館高等学校（京都府）、立命館守山高等学校（滋賀県）、立命館宇治高等学校（京都府）　15 府県 18 校

⑤ スケジュール概要

【１日目】

・各校の取組共有

・一グループ約六名の混合グループを編成

・各校の経験から各プロジェクトについてどのような発展が可能かを検討する。

・宇治市内のフィールドトリップ

【２日目】

・未来ワーク

・各グループでプロジェクトを練り直す

【３日目】

・各グループの最終発表と質疑応答

・有識者・専門家などによるフィードバック

⑥ フォーラムの内容・感想

ア　各校の取組共有

三崎高校は、「ふるさとのバトンをつなぐ～三崎おこしせんたん部プロジェクト～」と題し、昨年度分校化を回避するために取り組んできた内容についてプレゼンテーションを行った。

進学や就職を機に伊方町から都市部へ転出する生徒が多く、地域の担い手不足が深刻化している現状を踏まえ、地域を担う存在である高校生が、行政や関係団体、地域の人とともに活動する中で地域の良さを再発見し、地域に

誇りを持った社会人となり「ブーメラン人材」として地域に帰ってくるという、長期的な地域の活性化に取り組むことをプロジェクトのゴールとして設定した。

イ　フィールドトリップ（生徒感想）

フィールドトリップでは、最初にバスに乗り平等院鳳凰堂に行った。京都には行ったことがあったが、平等院鳳凰堂に行ったことはなく初めて見た。班の人と、「10 円玉に書いてあるよね。」などと会話をしたことを覚えている。そして、今回 SR サミットで集まったみんなと記念撮影をした。

その後は班に分かれて宇治の街を散策した。その中でも私が特に印象に残っているのは、至るところで抹茶を使った産物があったことである。抹茶を使ったスイーツや飲み物はもちろん、そばの中に抹茶が入っているものもあった。見た目は緑色で自分の地域では見ることのないものだったため、印象的だった。それだけではなく、お茶しか売られてない自販機があり、みんなスマホで写真を撮っていた。その土地を象徴するものを様々な形でアピールすることの大切さに気付かされた。

私は、移動している最中に APU の学生であるベトナム出身の方とたくさん話をした。ベトナムや日本のこと、差別のことに至るまで、たくさん話をした。私の知らない世界を知ることができた。私は人見知りで、周りが知らない人ばかりの今回の研修に対して不安を抱えていたが、勇気を持って話しかけることで、世界が開けるということを実感した。

私は、宇治市について、歴史的な建造物が多いという勝手な印象を持っていたが、実際には伝統ある街並みを残しながらも、訪れる人に楽しんでもらおうとする工夫が随所に見られたことに驚いた。特に、外国人観光客に対した配慮は素晴らしく、「おもてなし」の精神を感じた。

ウ　未来ワーク（生徒感想）

未来ワークのセクションでは、企業の方から課題探求の方法や原因分析の方法などについて直接ご指導をいただいた。私たちのプロジェクトについて、他校の生徒からもらった質問点や改善点をもとに、既存の活動やアイデアをブラッシュアップした。その中には厳しい意見やフィードバックもあったが、その厳しさにも感謝し改善策を練ることが、どれだけ効率的で大切かということを学ぶことができた。

未来ワークの中で特に印象的だった部分は、プロジェクトを進めていく上で、コストの削減や実現性の高さなどに着目する手法について学ぶことができた点である。「高校生が考えるプランだからコストや実現性を無視してや

りたいことを語ろう！」ではいけない。プロジェクトの確実な実現に向けて、効果的に動く方法を学ぶことができた。

エ　グループ活動

原則として各校一人ずつで６人程度のグループを編成し、コア校のプロジェクトがより良いものになるよう、グループ活動を行った。最終日にはグループごとにプレゼンテーションを実施し、本校のプロジェクトプランは、最優秀賞に選ばれた。

⑦　各グループの最終発表（最優秀校のみ抜粋）

ア　ふるさとのバトンをつなぐ（愛媛県立三崎高等学校）

(ｱ)　プロジェクトの概要

私たちが住む伊方町の課題は、少子高齢化と若者を中心とした人口減少である。若者が伊方町から流出していく大きな原因として、就職する際の選択肢が少ないということが挙げられる。また、そこには、自分たちの住む町の魅力に気付けていないという根本の課題がある。そのため、高校生である私たちが町内外を問わず、多くの人に伊方町の魅力を発信し、その魅力を伝えることで意識を変えたいと考えた。

そのために、私たちが今回考えたプロジェクトは、「サイクリングフォトラリー」というものだ。これは、伊方町の魅力を老若男女関係なく多くの方に知ってもらうため、サイクリングをしながら各チェックポイントで指定した写真を撮ってもらい、すべてのチェックポイントで写真を撮影した人には、地域の特産品や食堂の割引券をプレゼントするというプロジェクトだ。近年、健康増進や環境保護の観点からも、サイクリング人気は、国内はもちろん世界的にも高まっている。愛媛県内でも様々なサイクリングイベントが開催されているが、県外からの参加者も多い。また、若者を中心に、インスタグラムへの投稿も根強い人気がある。それら２つの要素をうまく融合することで、多くの人に情報発信する機会になるのではないかと考えた。

このプロジェクトには二つのプランがあり、一つ目が「日帰りプラン」、二つ目が「宿泊プラン」である。「日帰りプラン」というのは、自由参加型で国道九四フェリー等にパンフレットを置かせてもらい、興味があればいつでも参加できるというものだ。「宿泊プラン」というのは、予約制で年に２回の開催を予定している。伊方町内にある宿泊施設「瀬戸アグリトピア」を利用し、地域の人との交流を交えながら、郷土料理や、伊方町の海岸に多く漂着しているシーグラスを使ってのフォトフレームなどの作成を行う。自転車で佐田岬半島を移動しながら、伊方町なら

ではの体験をしてもらうところにこのプランの魅力がある。このプロジェクトを実施することにより、伊方町や三崎の魅力をより多くの方に知ってもらうだけでなく、町内にあるサイクリングロードの活用にもつながると考えている。将来的には、このイベントをきっかけにして伊方町に魅力を感じた人の移住につなげられるような活動を行っていきたいと考えている。

(ｲ) 課題分析

私たちが考える、伊方町及び三崎地区の課題は、アピール不足ということだ。今回の SR サミットでそのことを痛感した。なぜなら、伊方町や三崎にはたくさんの魅力ある場所や特産品があるにもかかわらず、あまり知られていないということを他県の高校生と話していて感じたからだ。プロジェクトを考える話し合いの中でも、愛媛のイメージといえば、「みかん」と言われた。確かにそれもあるが、魚介類や美しい景観、温泉だってある。それらを、もっと多くの方に知ってもらうには、どうすれば良いのか。その答えが今回のプロジェクトだ。

また、このプロジェクト自体にもまだまだ課題がある。まず、どのようにしてこの企画をたくさんの人に知ってもらうのかということだ。今回のサミットでは、フェリーの中と道の駅にパンフレットを置かせてもらうということになったが、それだけではフェリーのお客様や道の駅に来た人にしか知ってもらえない。また、地域との連携方法についても考えなければならない。「宿泊プラン」を実施するにあたって、地域の方の協力は必要不可欠だ。この二つの課題について、今後学校内で話し合いを行い、解決策を見付けていこうと思う。

(ｳ) グループワークで苦労したこと

グループワークを行う中で苦労したことは、なかなかプロジェクトの核となるものを決められなかったことだ。なぜなら、三崎高校の課題は、「三崎をもっと活発にしたい！そして、分校化を回避したい！」ということだったからだ。課題が大き過ぎて、どのようなことをすれば活発になるのか、高校に生徒が集まるのか、ということが分からなかった。

(ｴ) グループワークを通して学んだこと

グループワークを通して学んだことは、自分の意見を相手に伝えることの難しさ、それぞれの意見を１つにまとめることの難しさだ。私は今回リーダーとして参加したが、最初は三崎の魅力について上手く伝えられず、話し合いが進まないことがあった。しかし、グループのみんなが質問をしてくれたり、ゆっくりと話を聞いてくれたりしたおかげでなんとか進めることができた。アイデアをまとめることにも時間がかかってしまったが、最終的にまとめることができた。この経験から、私は少しではあるが相手に意見を伝えることが上手くできるようになったと思う。そして、自分に自信を持つことができるようになった。今回のこの経験を、今後の学校生活に生かしていこうと思う。

イ　子育て支援プロジェクト（宮崎県飯野高等学校）

（概要のみ抜粋）

このプロジェクトに対する私たちの思いは「虐待を減らしたい」ということだ。ある調査によると、虐待の主な加害者のうち、約 60%が実母となっている。そして、虐待を受けた子どもの年齢は０～３歳が 84%、４～６歳が４％となっており、未就学児がその大半を占めていることが分かった。そのため私たちのこのプロジェクトの対象は未就学児（０～６歳）の子どもを持つ母親、そして、これから子どもを産む妊婦とすることにした。

虐待の主な要因には「親の要因」、「子供の要因」、「家族を取り巻く要因」があると分かった。「親の要因」である育児不安や精神的不安、「家族を取り巻く要因」である核家族化による育児相談ができる人が減ってしまった、ということに対して私たち高校生でもできることがあるのではないかと思った。そこで、このプロジェクトを通しての私たちのゴールを「妊婦や母親が妊娠・子育ての不安やストレスを解消できる状態にする」ということとした。

ゴールが決まり、まず初めに飯野高校がある宮崎県えびの市の現状について調べた。そこで三つの問題が明らかになった。一つ目は「核家族化」の進行、二つ目は「市に産婦人科がなくなった」ということ、３つめは「ママ友の減少」である。ここから見えてきたことは、相談できる相手、そして、同じ悩みや不安について共感できる相手がいなくなるということが妊婦・母親にとって大きな問題であることだ。これらの問題により、母親のストレス増加や、母親の自分の時間の確保が困難になる。そこで、私たちは「妊婦・母親が息抜きできる機会が少ない」という課題に取り組むことにした。

先行事例として飯野高校が行ってきた「NoGiKu」という活動がある。この活動では、母親のためのサービスを行っている。しかし、この「NoGiKu」にも課題があった。それは参加者が少ないことだ。この課題により、情報共有に欠ける、子どもの年齢幅が狭くなる、という新たな課題も増えた。これらの課題を解決するために、妊婦・母親が息抜きできる機会を充実させようと決めた。そこで私たちは二つのアクションを考えた。

一つ目のアクションは、「NoGiKu」をもっと充実させることを目標に、今までの活動にランチ会をプラスするものだ。対象者は妊婦・母親に加え、これから妊娠を望んでいる人も対象とした。これまでの「NoGiKu」

では癒しサービスが主だったが、ランチ会をプラスすることで母親同士だけではなく、専門家と妊娠や育児に対する情報を共有することができる。情報共有することで不安が解消されるのではないかと考えた。また、これから妊娠を望む人にとっても、子育てに対する前向きな気持ちが芽生えるのではないかと考えた。そういった気持ちが将来的に少子化問題の解決につながるはずである。

二つ目のアクションとして、従来の活動をより充実させるために新しいイベントを作ることにした。目的は母親のストレス解消である。それが「お母さん、一日したいことをしよう！」というイベントだ。例としては、アロママッサージを受けたり、えびの市の観光地の温泉に入ったり、一人で自由に過ごしたりするというものだ。今回、私たちは三つの例を挙げたが、本来は事前にアンケートを行い、お母さんたちがしたいことを具体的に聞こうと思っている。母親がサービスを受けている間、飯野高校の生徒が子どもを預かることもできるが、父親が子どものお世話をする、ということもありだと考える。

このプロジェクトを実現するにあたっての費用の調達方法についてだが、根本的にコストを低めにすることが重要だ。クラウドファンディングを用いるという案も出た。そして、クラウドファンディング用の告知にも力を入れる必要がある。また、三崎高校のように町からの補助金をもらう、という案も出た。

高校生である私たちにできることは限られるかもしれないが、私たちができることを、できるまでやり切っていきたいと思う。そしてこの活動が虐待減少につながっていくのが理想である。

⑧　引率教員による所感

ア　大西　純（地域協働課）

三崎高校では、地域協働課が中心となって地域おこしや総合的な学習（探究）の時間の運営や取組を行っている。私自身母校である三崎高校へ３年前に赴任して、主に吹奏楽演奏での地域活性化、そして、「みさこうたいそう115」の普及活動に精力的に取り組み、これらの教育活動を通して、学校現場だけでは見ることのできない生徒の成長を目にしている。しかし、指導する側としては、このような活動の指導に対して多くの困難や壁に直面していることも事実である。そのような状況の中で今回のサミットに参加し、全国から参加した多くの生徒や教職員、企業の人の価値観に触れることで私自身も大きな刺激を受けた。特に、多くの先生方が皆同じような悩みを持っ

ており、それを共有できたことで、このような課題が現代の教育の課題であると同時に、教育が大きな転換期にきているのだと実感した。このような研修を通して、自身の視野や価値観を広げることは、今後も様々な背景を持ち、三崎高校へ入学してくる生徒たちの指導において有用であると感じた。

また、見えてきた課題としては、地域や学校によって様々な教育資源の格差があるということである。生徒数が多く、生徒が豊かな発想やアイデアを持っている学校では、予算や備品などの教育資源が充実しており、生徒の意見を反映しやすい環境整備が整っていた。本校でも、生徒が地域のために多くのアイデアを考えているが、限られた予算と時間の中でどのように実現させていくのかが課題となっている。

今回参加していた高校と比較しても、三崎高校は、特に地域と協働して地域活性化のために取り組んでいる学校であると言える。今後、三崎高校が、生徒の豊かな発想や考えを生かしながら地域活性化の取組をはじめとする教育活動を進め、地域の発展につなげるためにも、これまで以上に地域資源を活用したり、町と学校の連携を継続して活動を行ったりするなどの取組が必要である。このことが、学校と地域が共に生徒を育てる意識を一層深め、更なる伊方町の発展、そして三崎高校の存続にもつながっていると信じている。

イ　河野 雄太（地域協働課）

三崎高校に赴任して１年と少しが経過したタイミングで今回のサミットの参加できたことは、私自身にとっても大きな転機となった。

もともと地域と学校、行政とが連携して子どもの健やかな育成にコミットするという理想の教育を追求したいと考え、私は三崎高校での勤務を熱望してきた。この１年間地域協働課の一員として、また、せんたん部の顧問として、様々なチャレンジをしてきた。その活動の中で、地域の人の温かさや行政の手厚いサポート、そして、何より生徒たちの課題意識の高さを強く感じた。

三崎高校には、伊方町外から入学する生徒も少なくない。その生徒たちが、三崎高校を好きになり、伊方町を好きになる。「自分たちが好きな学校や町を守りたい」という課題意識を持つ生徒が学年を重ねるにつれて増えていくことに感動を覚えている。しかし、その一方で、直近三年間において、求められている生徒数を確保できていないという現状がある。どうすればこの魅力ある学校や町のことを、より多くの人に知ってもらえるのか。そのヒントがこの SR サミットにはあったと感じている。

今回、参加した 18 校のうち、地域課題に対してのコミットをしていた学校は、本校を含めて３校だけであった。多くの学校が地球規模の貧困や教育課題を解決するためのプロジェクトプランを作成していた。しかし、三日間のプログラムの最後に行われたコンペティションで優秀賞を獲得した学校は、地域の子育て問題に着目した宮崎県の飯野高校、そして、本校であった。このことからも、「地域を守りたい」という純粋な気持ちは誰の心にも訴えるものがあり、課題意識の共有がしやすいということが分かった。

これまで三崎高校では、地域おこし活動について一方的に発信するだけで、同じように地域おこし活動にコミットしている学校や自治体と協働す

るということをあまり積極的に行ってこなかったのではないかと感じている。この３日間を通して、生徒たちは自らが持つ課題意識を共有し、共に深めることの大切さを学んだ。

サミットが終わり、参加した生徒たちからも他の学校ともっと協働して取り組みたいという声が多く挙がっている。各地方による、魅力的な地方創生が求められている今こそ、その活動を自らの地域だけで完結するのではなく、地域を超えて広く課題意識を共有し、共に知恵を出し合う必要性を強く感じた。

(2)　第３回せんたんミーティング

①　実施のねらい

伊方町唯一の高校である本校生徒は、過疎化、少子高齢化が進む地域において、地域活力の一端を担う存在として、ますます地域的役割を求められるようになっている。また、そうした状況を踏まえ、総合的な学習の時間等を通じて「地域」との連携を深めている。一方で、学校教育が目指す、学校と地域の連携・協働の在り方と、地域側の持つ「個別の課題解決に必要なマンパワーの間の擦り合わせには、より高度化された「地域協働の一体的仕組み」が不可欠だと考えられる。

そうした状況へのアプローチとして、高校生による「地域における新たな主体形成（地域活動プロジェクト化）」が、課題改善の一つの方向性ではないかと考え、高校生自らがプランニング～運営～実施のプロセスを形成する「高校生シンポジウム」の活動を計画した。

本活動を通して、参加生徒が、自ら課題を発見し自ら課題を解決する力を養うとともに、他地域の高校生と交流することで、今後より良い活動を行っていくためのネットワークを築くことをねらいとしている。

②　実施日時

令和元年９月 28 日（土）～９月 29 日（日）

③　実施場所

三崎総合体育館、瀬戸アグリトピア

④　参加校

愛媛県立今治北高等学校大三島分校、愛媛県立松山商業高等学校、愛媛県立小田高等学校、愛媛県立三瓶高等学校、愛媛県立北宇和高等学校、愛媛県立三崎高等学校、高知県立佐川高等学校　２県７校

⑤　スケジュール概要

【１日目】

・先端にであう　事例発表

・先端でかたる　グループワーク

・先端をあそぶ　まち歩き

【２日目】

・先端でさけぶ　プレゼンテーション

⑥　実施内容

９月 28 日と 29 日の２日間、高校生フォーラム「せんたんミーティング」を開催した。県内外の高校生、大学生が佐田岬半島の″先端″に集まり、それぞれの学校で行なっている取組について発表し合い、議論を深めた。

このイベントの特徴は、２日間を通してそれぞれの学校の地域おこしの事例を共有し、今後の持続的な課題解決のために高校生同士で創造的な意見を生み出すところにある。今回は新しい試みとして、生徒一人一人がより高い課題意識を持つために、各グループのリーダーが所属する学校のプロジェクトを他校の生徒が多角的視点を持ってブラッシュアップし合うという内容にした。これは、今年度に京都で行われた立命館宇治高校主催の「全国高校生 SR サミット」から生徒たちがヒントを得て生まれたアイデアである。

本年度は、各校が事例発表を行う「先端にであう」、コア校の事例発表を基にグループワークを行う「先端でかたる」、まち歩きを行う「先端をあそぶ」、グループで練り上げたアイデアをプレゼンする「先端でさけぶ」という四つのプログラムで開催された。企画した生徒たちは、より良いプログラムになるよう事前に話し合いを重ね、昨年度のプログラムを変更したり、改良したりするなどして内容を決定した。

プログラム１「先端にであう」では、各校の事例発表が行われた。どの学校も、学校や地域の特色を生かした活動がされており、参加した生徒たちは当事者意識を持ち真剣に発表に耳を傾けた。県内の東予、中予、南予という各地域の学校に加え、県外の高校生の取組についても発表があったため、生徒たちにとっては新たな発見や気付きも多かったようで、発表の合間に熱心にメモを取る様子が見られた。多くの事例発表を聞くことは、新たな知識や視点を得ることにつながり、柔軟な思考力を持つ高校生にとって貴重な学びの場になっていると感じた。

プログラム２「先端でかたる」では、事例発表後に新しいグループ分けを行い、それぞれのグループのコア校の事例について、どうすればもっと良いものになるのか話し合いを行った。初めて聞いた活動について初対面の人と話し合いをするということで、初めは戸惑いを隠せない生徒たちだったが、「地域を盛り上げたい」という共通認識もあり、すぐに打ち解けプロジェクトの作成に取り掛かった。リーダーとなった生徒は、自分たちの思いを伝えつつ新しい視点からの意見をまとめるなど、ファシリテーター的な役割も担い苦労している場面もあったが、良い経験になったことが後日の感想からもうかがえた。

プログラム３「先端をあそぶ」では、伊方町唯一の博物館である町見郷土館の学芸員である高嶋賢二氏を講師として、三崎を巡るまち歩きを行なった。地域の神社や国指定の天然記念物となっている「あこう樹」などについて、説明を受けながら見学した。ほとんどの参加者が、伊方町を訪れることが初めてであり、一つ一つの説明を興味深そうに聞いていた。また、本校生徒にとっては見慣れた風景であっても、町外から来た高校生が面白がったり、ほめてくれたりしたのがうれしかったようである。本校の生徒たちは、今回のまち歩きを通して自分たちのふるさとに自信を持ったり、地域の魅力をもっと上手く発信していけば、多くの人が伊方町に訪れてくれるようになるのではないかという、ふるさとの潜在能力を感じたりしていた。

その後は、本校の卒業生である宇都宮圭氏がオーナーシェフを務める地元レストランに移動し、地域の食材を使った料理を囲んで親睦を深めるとともに、宇都宮氏から地域で暮らし、まちづくりを行うことの意義ややりがいについて話をしてもらった。

夕食後は瀬戸アグリトピアに移動し、グループワークの続きを行なった。どのグループも真剣に各々の課題を解決するためのアイデアを出し合った。しかし、なかなか革新的かつ持続可能なアイデアにたどり着かず、何度も振り出しに戻った。ワーク終了の時間になった頃、各グループのリーダーから「もう少しだけやらせてください」と声が上がった。この時、参加したすべての生徒たちが、限られた時間で結果を出すことの難しさを実感していた。

どのグループも、より良いプランを作成することができるよう、班員と協力しながら消灯時間の間際まで話し合いを続けていた。精神的にも肉体的にも苦しい部分もあったと思うが、どの生徒の表情も真剣で、この活動を通しての成長を感じることができた。

２日目には、プログラム４「先端でさけぶ」として、株式会社ＳＰＣ代表取締役の横山ぬい氏、愛媛大学社会連携推進機構の秋丸国広准教授、本校若江亨校長に審査員を務めてもらい、プレゼンテーション大会が行われた。

どのグループも、コア校のプロジェクトを基に新たなプロジェクトを作成したが、グループのメンバー全員がまるで自分のふるさとのことを思い、話すように真剣にプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションが苦手な生徒や、このようなイベントに初めて参加した生徒も、それぞれが当事者意識を持ち、自分たちの想いを伝えてくれた。

この２日間を通して、高校生の可能性の高さを感じることができた。ふるさとや地域を思う気持ちが共有されたとき、大人では考え付かないような大きなインパクトが生まれる。せんたんミーティングで生まれた「地域おこしの輪」をもっと広げていきたい。

⑦　告知方法について

(ｱ)　参加校の募集

前回までは参加校の募集が直前になってしまい、フォーラムに参加する学校数が目標数に達していないという課題があった。そこで、今回は年度始めの４月から参加校の募集を行った。結果として、過去最大規模でフォーラムを実施することができた。

(ｲ)　フライヤーの作成

より広くこのイベントの告知を行うために、フライヤーのデザインをグラフィックデザイナーの宮内潤佳氏に依頼し、せんたん部と協働する形で作成した。「生徒がデザインしたものをフライヤーに反映したい」という宮内氏のアイデアから、本校１年生の描いたキャラクターがフライヤーに反映されるなど、生徒とプロのデザイナーがコラボレーションしたフライヤーが完成した。

完成したフライヤーは、「佐田岬はなはな」をはじめとする地元施設に置かせてもらうだけでなく、せんたん部の生徒たちが町内の小中学校に赴き、このフライヤーを用いてイベントの告知を行なった。

⑧　生徒の感想

(ｱ)　イベントの運営をしてみて

私は、今年の夏に京都で行われた「高校生 SR サミット FOCUS」に参加した。愛嬌もあり知識も豊富な同世代の高校生に圧倒されると同時に、「私にもできることがある！」と強く感じた。中学校の頃から人前に出ることに苦手意識があり、いつも誰かと比べて引っ込んでばかりいた私にとって、夏の SR サミットは大きな転機となり、このせんたんミーティングでは前線で議論にも参加し、良いアイデアをたくさん出そうと意気込んでいた。しかし、先生から「今回のせんたんミーティングでは司会と裏方を頼む」と告げられた。正直、最初はあまり気が進まなかった。「他の学校の生徒と意見の交換をたくさんしたいし、プレゼンテーションもしたい。」そう思っていた。しかし、実際に裏方の仕事をしてみると非常に学びが多く、自分を成長させることができた。特に、裏方や運営の仕事は、参加する人に安心感を与えることが大切だと気付くことができたことが、一番の学びであった。イベントの運営をしていると、参加者からどのような質問が飛んでくるか分からない。だからこそ、しっかりと状況を把握して対応する必要がある。この経験を日々の学校生活や地域おこし活動に生かしていきたい。

（三崎高校せんたん部　１年　大西 友海）

(ｲ)　地域の課題、自分の課題と向き合うこと

今回、初めて三崎高校主催のせんたんミーティングに参加させていただいた。参加する前は、ちょっとした合宿のようなものだと軽く考えていたが、初日のグループワークの時点で自分の考えの甘さに気が付いた。どの学生も地域課題について自分事として捉えており、私たちが地域おこしについて、授業の一貫程度にしか捉えていなかったことを恥ずかしく思った。２日間を通して、自分のリーダーとしての力の無さを痛感すると同時に、同じ目標を持つ仲間と協力する楽しさを知った。もっとリーダーシップを身に付けたいし、もっとプレゼンテーションもうまくなりたい。このイベントを通して、自分の課題も見つけることができた。本当に参加して良かったと思う。

（松山商業高校地域ビジネス科　２年　渡邊 結衣）

(ｳ)　『鬼』の町を元気に！

僕はせんたんミーティングに参加して本当に良かったと思っている。３年生ということもあり参加するかどうか迷ったが、このイベントで得たものは大きい。グループワークでうまくみんなをまとめることができず、プロジェクトの方針が固まったのは初日の夜であった。それにも関わらず、グループのみんなは僕についてきてくれて、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。最終的に「ガチャガチャで地域おこし」というアイデアに辿り着き、プレゼンテーション大会で１位になった時は本当にうれしかった。今回のイベントを通して、リスクを恐れて挑戦しないより、まずはチャレンジしてみることの大切さを学んだ。これから大学受験を控えているが、チャレンジすることを忘れず、勉学に励みたい。

（北宇和高等学校　３年　山本 祥裕

(ｴ) 充実感と達成感

県外から参加している学校は私たちだけ、他はすべて愛媛県の学校ということで、最初は正直びっくりしたし、不安な部分ばかりだった。私のグループは松山商業高校のプロジェクトで、地域活性化のために、大街道と銀天街をもっと活用するというものだった。私は、大街道も全く行ったことがないし、話にも全然ついていけなかった。それでも、周りの子たちが丁寧に説明してくれたり、写真を見せてくれたりして、徐々に話についていくこともできた。みんなで真剣に話すこともできたし、分からない時は先生がアドバイスもくれてとても助かった。特に、リーダーの子が頑張ってくれて、それに応えようとみんな本当に頑張った。こんな経験をすることは高知県ではできないかもしれない。みんなで協力することがこんなにも充実感と達成感を与えてくるなんて思わなかった。来年も絶対に参加したいと思った。

（高知県立佐川高校さくらガールズ　１年　和田 葵）

５　集落等コミュニティに特化した課題解決カリキュラムの開発

(1)　類型毎の趣旨に応じた取組について

地域魅力化型の趣旨を踏まえ、学校と地域が協働することで互いの強みを生かしつつ、さらなる相乗効果を生むことをねらいに活動に取り組んだ。学校の強みとしては、高校生らしい柔軟な発想力を生かした活動を行っていくことや、地域の行事や伝統文化の後継者としてこれらの活動に活力を与えられることである。一方、地域の強みとしては、学校内だけでは実践することのできない探究的

な学習活動の場を提供できることや、多様な人との関わりを通して、コミュニケーション能力などの「生きる力」を育むことができるということである。本校は、愛媛県内で高齢化率が２番目に高い伊方町に立地しており、地域課題が生徒一人一人にとって身近なところにある「地域課題先端地域」である。しかし、それを否定的にとらえるのではなく、「最先端の学びができる地域である」と肯定的に捉えることで、生徒一人一人が明るい展望を持ちながら課題解決学習に取り組むことができている。また、地域住民との距離が近く、本校への関心が高く期待も大きいため、協働的で開かれた活動を行うことができている。

(2)　学校設定科目「未咲輝学」について

本年度の取組を基に、さらに系統的かつ、持続的な取組を行っていくために、来年度には学校設定科目「未咲輝学」の開講を予定している。週に１時間、学年ごとにテーマを決めて学習活動を行い、３年間の系統的な授業を通してブーメラン人材として必要な力を育成することを目標として学校設定科目を設定することにした。また、学校設定科目を新設することでカリキュラムを再編し、効果的な学習活動を行うとともに生徒・教職員の負担を軽減することも目的としている。

１年生は、「地域理解」をテーマに、地域の名所・史跡見学や地域の産業調査、インターンシップ等の活動を行う。地域の郷土館の学芸員や地元企業の人に協力してもらい、地域の人と積極的に関わることで、より深く地域理解を行っていきたいと考えている。

２年生は、「地域課題の発見・解決」をテーマに活動を行う。地域課題を経済的側面から考察するために、経済産業省と内閣官房（まち・ひと・しごと創生本部事務局）が提供している RESAS（地域経済分析システム）を用いて研究を進める。その研究結果を「地方創生☆政策アイデアコンテスト」や「全国高校生マイプロジェクトアワード」に応募することで、第三者による客観的評価を得る場とし、自分たちの活動の見直し、改善を図る機会ともする。

３年生は、「みっちゃん大福」や「裂織り」といった、総合的な探究の時間等に開発した商品を中心にして、マーケティング、製造、販売等を行う模擬企業経営等を行う。１、２年次の活動の集大成とするとともに、経済活動の観点を取り入れた探究活動を行っていくことで、起業家育成の基礎ともしたい。

地域の特色を生かした商品づくり、販売を行うことで、地域の魅力を発見し、地域の新たな雇用の場としてブーメラン人材の地域へのＵターンを促すとともに、地域経済を支えることのできる起業家の育成を目指して学校設定科目の研究に取り組んでいきたい。

６　校内体制

(1)　地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

校内の教育課程委員会において、各教科等における取組内容や、実施時間の原案を年度当初に作成した。その原案を基に、カリキュラム再編のための校内検討会議を開き、実際の運用や実施状況についての情報共有を図った。また、コンソーシアムや運営指導委員会においても、実施状況等を報告し、適宜、指導・助言を受けた。

(2)　学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

地域協働課を中心として、本校がこれまでに築き上げてきた実施体制において研究を行った。具体的には、研究テーマごとに生徒を縦割りにした班を作り、複数名の担当教員を配置した。教員の役割としては、生徒の活動における助言や、外部人材との連絡、調整等が挙げられる。地域協働課員は、各研究班に必要な外部人材の紹介、調整を行ったり、班ごとの連携を図ったりするなどして担当教員のサポートを行った。また、各研究班の担当教員や代表生徒が定期的に進捗状況等を話し合う場を設定することで、各班がスムーズな情報交換を行い、それぞれ連携したり、サポートし合ったりしやすい環境作りを行った。さらに、カリキュラム開発等専門家から助言や提案、外部人材の紹介をしてもらうことにより、より深まりのある取組を行うことができた。

(3)　学校長の下で，研究開発の進捗管理を行い，定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ，計画・方法を改善していく仕組みについて

総合的な学習（探究）の時間に、班ごとに生徒が記録簿を記入し、進捗状況が分かるようにしている。成果の検証については、年度当初と年度末に生徒対象に実施したルーブリックの分析や、生徒のレポート、成果発表会などから総合的に判断した。年度末には、地域協働活動成果検証会を行い、本年度の成果の検証と次年度の改善点を話し合う機会とした。